

浪江の こころ通信



・第21号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第21号」への
感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218



ぼくらの未来

2月7日、浪江小学校でふるさとなみえ科のまとめとして、「未来のふるさとなみえを考えよう」発表会が行われました。

同校では、「ふるさとなみえ科」をつくり、浪江町の歴史、産業などを学び、浪江町の未来を子どもたちで考える学習を進めてきました。1年生から6年生まで全員で学習に取り組み、公共施設・福祉・復旧復興・産業・商業・娯楽施設の6グループに分かれ、自分たちの意見を発表し、「目立って誰もが頼りにできる『にじいろ警察署』の建設」や「買い物や病院に行くときに便利なお手伝いカーの運行」など、子どもたちの発想豊かなアイデアが出されました。



まちの話題

皆さまの身の回りにある楽しい話題、変わった話題などの情報を募集しています。

TEL 0243-62-4731

復興願い、安波祭

2月17日、福島市と二本松市の仮設住宅で、安波祭が開催されました。

これは、2月の第3日曜日の安波祭の日に合わせて開催されたもので、鎮魂と復興を願い神楽と田植踊りを奉納しました。

各仮設住宅には、多くの町民が集まり、ふるさとに思いを馳せました。



北幹線第一仮設住宅



安達運動場仮設住宅

賀寿の祝い

遠山シン子さん(立野)が、1月25日で満100歳を迎えられ、29日にご家族へ賀寿(賞状)と町からの祝い金、県から会津漆器の木杯が手渡されました。

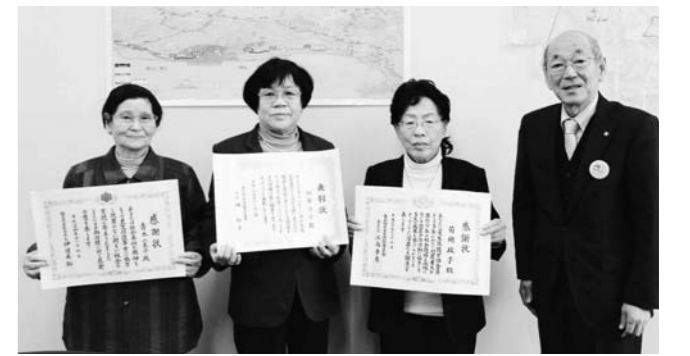


長寿の秘訣は、好き嫌いなく食べることに、ストレスをためないことといいます。現在シン子さんは、神奈川県で元気に過ごされています。



おめでとうございます

浪江町保護司の菊地政子さん(藤橋)が東北地方更生保護委員会委員長感謝状を、加藤洋子さん(請戸)が東北地方更生保護女性連盟会長表彰、青木二美子さん(加倉)が福島保護観察所長感謝状を受賞され、受賞報告に役場二本松事務所を訪れました。菊地さんは、「このたびの受賞を励みに、さらに精進します。」とお話してくださいました。





佐々木三千夫さん・由美子さん(西台)

取材者：きょうとNPOセンター 田口
取材日：2月11日

諦めきれない思いを胸に抱いて・・・

佐々木さんご夫婦は、息子の和幸さんが大学生活を送られている京都に、娘の美紗さんと一緒に避難されています。父の幸夫さんは、少しでも浪江に近い所に居たいということで、いわき市のアパートに住んでいます。この春、美紗さんが高校卒業と大学入学を迎えるのを期に、三千夫さんの仕事に合わせて、郡山市での生活をスタートされます。

間もなく福島県に帰ります。震災の後、2年近く生活をした京都から、「原田時計店」を再開させるため郡山市に移る決断をしました。震災当時は、兄と一緒にやっていたお店の再開の目処もたらず、また娘の学校の心配もあり、家族が近くにいられたらとの思いで泣く泣く福島を後に京都へ移りました。特に、家内は京都での最初の1年は辛かったです。なぜ、私たち福島の人だけがこのような目に遭うのだろうか、塞ぎ込む日々が続きました。同じ日本であっても、こちらは地震もなく東日本大震災はまるで外国の出来事のように、何もなかったかのように日々が流れていききました。けれど、その後被災されている人々との出会いや同郷の仲間との再開に恵まれ、本音で語り合えるようになったことが救いになったようです。

私も、こちらの職場の方々に良くしていただき気持ちがとても落ち着きました。何より、娘がこの多感な時期に、友だちとの別れもできずに原町高校から一人こちらの高校に転校しながらも、慣れない土地で一生懸命高校生活を送る姿に私たちは支えられました。生まれ育った浪江で、人生を終えていく。それがあたりまえのことだと思っていました。浪江を離れてみて感じたことは、気候は良いし食べ物も美味しい、そんな浪江で普通に暮らしていたこと。人と人とのつながりの中であたりまえのように暮らしていたこと。それが一番ありがたいことだったんだということ。浪江は私たちのいるべきところ。浪江に代わる場所はどこにもありません。かと言って、元の浪江に戻るのは難しいことだと思っています。けれどやっぱり諦めきれません。この先、心の底から笑える日が来るのだろうか、つくづく思います。そんな気持ちを抱えながら、郡山市での生活は、離れていわき市に住んでいる父と私たち夫



▲左から、三千夫さん、由美子さん

婦の3人で、一からのスタートです。懐かしい人との再会や新しい出会いを楽しみに、その人たちのつながりの中で、私たちの普通の暮らしを築いていきたいと思えます。



岡田 有一さん・貞子さん(大堀)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：2月8日

仲間と一緒に飲みながら また浪江の未来や夢を語りたい

岡田さんご夫妻は、現在山形市の借り上げ住宅で生活しています。震災から数カ月間、場所を移動することばかりで先が見えない状態でしたが、今は娘さんご家族、息子さんも近くに住んでおり、山形でやっとほっとして暮らしているそうです。



▲左から貞子さんと有一さん。借り上げ住宅で。お孫さんが遊びに来ると、座布団を滑り台にしたり、押し入れのものを全部出したりと、とてもにぎやかになるそうです。

■有一さんのお話
震災時、出張で東京の高層ビルの中におり、ビル同士がぶつかるかと思うほどの揺れを経験しました。家族と連絡がとれず、逃げた場所、放射能の風向きが不安でしたが、車を乗り継いでやっと福島県に戻り、原町で家族と無事会うことができました。その後、国見の友人宅に家族10何人で身を寄せました。その方は、ガゾリンを持って迎えに来てくれ本当にありがたかったです。私たちは一昨年7月から山形に暮らしており、今では

近所の方とも気兼ねなく話をしています。地域に対して夢や希望を持ち、目標があればいくつになっても”地域のためになんとか頑張ろう”となると思うのですが、いつ帰れるかわからない状態で、継ぐかわからない状態で、絆だけではなんともならなくなってきたように感じています。こればかりはなんともしようがない問題です。浪江の未来や希望が形になり、全員で一生懸命になれる何か旗印を掲げていくことも大切かと思っています。高校の同級生6人で思いを綴るノートを40年以上交換し合っており、今も毎月行き来しています。切磋琢磨し合ってきた本当の友だちです。けんかもしますが、やはり顔を見ないでいられません。またバカになれる仲間とわいわいお酒を飲みながら、夢や未来について本気で語り合いたいですね。

■貞子さんのお話
地震による自宅の損傷はありませんでした。娘からみんな津島に避難するらしいと聞き家を出ました。夫と息子が出張でおらず、私たちだけでなんとかしなければという思いでした。浪江の自宅縁側から見える風景を思い出します。大高倉が見え絵に描いたような風景でした。私たちの住む大堀地区は行事や会合など集まることが多い地区で、みんなが地域のために本気で話し合い暮らしていました。忙しかったけど楽しかったですね。突然やるのがなくなってしまうことが辛いです。そういう状況なので精神的に苦しい方が多いと思います。この間大堀地区の婦人会で集まり、「このままだったらばらばらになっちゃってしまう。一人でいる間も何かやっていこう。」と話になり、それぞれが小物を製作し会合のとき皆さんに渡すつもりです。「大堀の婦人会元気ですよ！」ということを伝えられたらと思っています。



飛田 実さん・エチ子さん(下津島)

取材者：茨城NPOセンター・ commons 小原
取材日：2月12日

根は茨城で、心は福島で



▲とても気に入っている今のご自宅をバックに

60歳で退職してから浪江町で果樹園を営んでいた飛田実さん。今は妻エチ子さんと茨城県城里町で静かに暮らしています。

■思い出深い果樹園のこと
経営していた建設関係の会社を60歳のときに後継者に譲って、それから十数年、りんごや梨、桃の果樹栽培をしていました。農業高校の出身なので、ずっとやってみたいと思っていたんです。最初は商売でやる気はなくて、出荷もしていませんでした。たくさん実がなるようになってくると、保育所や高校の子どもたちがりんご狩りや摘果作業で来てくれて、浪江の広報でも取り上げられました。先生の「写真を撮るから」という制止も聞きやしないで、小さな子どもたちがりんご1つを丸かじりでペロ

りと食べてしまう姿をいつも思い出します。高校生のときに1度来た青年が、就職してから里帰りのときにわざわざうちの果樹園に来てくれたりもしました。浪江では、そうした触れ合いを生きがいに、年中働き通しで楽しく過ごしていました。今はそれがピタッと止まったのが悲しいですよ。おとしはストレスで身体も動かなくなっていました。ずっと身体を動かしていた人が動かなくなると、そんなこともあるみたいですね。針灸の先生にお世話になって今は大分良くなりましたけどね。

■避難の中で人の温かみを感じる
会津など3回の移住を経て、昨年の4月までは名古屋にいたんですが、孫の学校のこともあって福島に近い茨城に越してきました。しばらくは水戸にいました。周りは若い人ばかり。昼間はいいので交流もなかったり、騒々しかったり、城里に引っ越ししました。これで震災以降住居を変えたのは6回目になりました。今の自宅の周りには家が10軒あって、私たちと同じように高齢者ばかりなので交流がありますよ。孤独が一番辛いですから、人との交流が一番大事です。物やお金ではないと感じます。浪江の友だちと電話で話すのもいつも楽しみにしてる

んです。

名古屋は福島とはずいぶん環境が違ったし、都会だったので、田舎育ちには合わなかったけど、地元の人たちに本当に良くしてもらいました。向こうの支援団体が心配して手を差し伸べてくれたのが嬉しかった。交流会も企画してくれて地元の人々が手作りしているんなものを作ってくれた。子どもも、心配して電話してくれたり、親のことを考えていないように考えてるんですね。避難の中で、人の温かみを感じています。失ったものも多いけど、そればかりじゃなくなって。

■根は茨城、心は福島
再処理工場や使用済み核燃料の行方が決まらない。そして、福島原発事故だって完全に収束したとは言えない中で、やはり原発は再稼働させないでほしいと思います。原発の事故で私たちも避難生活をしているわけですから。

当然帰れるなら帰りたいという思いがあって、よく元の家の写真を眺めています。今の家もとても気に入っています。庭が広いので手入れしていくのが楽しみです。65年も浪江にいたから、やっぱり忘れられないし、ふるさとの人に会いたいです。根は茨城で、心は福島でやっついていこうと思っています。



苅野陸上クラブ・浪江町陸上クラブ 監督 佐藤 博文さん(苅宿)

取材者：浪江町役場 鳴原・小峰
取材日：2月6日

一緒にふくしま駅伝を走りませんか

二本松で奥さまと避難生活をされている佐藤さんは、苅野陸上クラブで20年近く指導をなさっていて、ふくしま駅伝では浪江町の監督を務められています。浪江町のチームとして、今後も入賞をめざし継続して参加していきたいと話されます。



▲浪江町駅伝チームの皆さん。一緒に走りたいたいの連絡お待ちしています。

連絡先 浪江町教育委員会生涯学習係 ☎0243-62-0304
◇浪江町陸上クラブ <http://kaririku.web.fc2.com/ekiden.html>
◇苅野陸上クラブ <http://kaririku.web.fc2.com/>

震災当日、余震による被害を心配して、家族8人でハウスに避難していたところ、自衛隊が原発に向かっていて、原発が危ないと判断して、夜中の内に姉夫婦が住む原町経由で本宮の親戚宅に行きました。翌日、水蒸気爆発のニュースを聞き、親戚も一緒に20人程でいところを頼って東京まで避難しました。それから、2週間ほどお世話になりましたが、仕事

の関係で本宮に戻りましたが、いろいろ考えた末、昨年6月に34年間勤めた職場を退職しました。息子家族と娘たちとは離れて暮らしていますが、妻と両親は同じ二本松にいます。

陸上競技のスポーツ少年団「苅野陸上クラブ」では、基本を大事にする指導を続けてきました。現在もクラブは継続していて、今年も5月から7月まで週1回の練習と夏合宿を予定し、夏に行われる小学生中心の全国大会を目指していきたいと思っています。

一番に力を入れたいのが、ふくしま駅伝で浪江町として走り続ける事です。25年続くふくしま駅伝の1回目から関わってきました。選手がばらばらに避難している今は、選手の情報を把握することが大変で参加自体が困難になってきています。浪江でやってきたこと、ふるさとを薄れさせたくない思いがあるから、避難先の学校で活躍している子どもたちにも、浪江町の選手として走ってほしいと願っています。ふくしま駅伝浪江町を応援する会を、前監督が中

心となって立ち上げ、以前駅伝を走った子どもの親御さんがバックアップしてくれました。大変心強く、つながっていることを感じました。2年連続で入賞していましたが、一昨年は参加できなかった喜びでした。昨年は今年が入賞という目標を持って臨んでいきたいと思っています。

「浪江町陸上クラブ」を春休み立ち上げ目標に動いています。中学生以上を対象に週1回土曜日に活動予定です。トラックを使える練習場所も確保したいと思っています。ホームページも作成しました。ふくしま駅伝と一緒に走りたいたいの子は、ぜひ、連絡ください。

16名のメンバーをそろえて私たちの「浪江町」チームとして走りましょう。



伊達 健三さん・サダ子さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 阿部
取材日：2月12日

長年住み慣れた自分の家がある浪江町に早く帰りたい



▲伊達健三さんとサダ子さん、愛犬さくらちゃんと

震災前はご長男夫婦と一緒に住んでいましたが、現在はご夫婦と愛犬のさくらちゃんと福島市の借上げ住宅にお住まいで、まもなく1年になります。

■あの日は何がなんだか
あの日は自然薯を握りに近くの山に友だちと出掛けていて、地震に遭いました。揺れがおさまると同時に自宅にいる妻が心配で急いで戻りました。妻は近所の人たちと近くの公園に避難してしまいました。自宅の中は物が散乱し、天井は落ちていました。その晩は一緒に住んでいた長男夫婦と4人で庭にテントを張り過ごしました。
次の朝、請戸に住んでいる親戚がやってきて原発のことを初

めて聞かされ、着の身着のまま車一台で避難することになりました。朝8時ごろだったと思います。道路はあちらこちら陥没がひどく、また避難する人たちの車でものすごい渋滞でした。途中、加倉のコンビニの付近を走っていたとき、時間は定かではありませんが大きな水蒸気爆発の音を聞きました。
午後1時くらいに津島高校へ着きましたが人がいっぱいいて農村広場へ移動し、炊き出しのおにぎりをいただきました。そこでは、白い防護服を着た人たちが手に何かを持って土手を歩いているのが見え、こんな所へはいられないと今度は川俣のリオンドールの駐車場と落ち合いました。車の中で一晩を過ごしました。翌日、東和の元小学校へ避難したものの断水で、役場に誘導され二本松の城山総合体育館へ避難し、4日間すごしました。
その後、親戚の友人を頼って山形へ移り3月半ばから2カ月程お世話になりました。
娘家族は茨城に避難していましたが、仕事のため福島に戻る娘の代わりに中学を卒業するまで孫の面倒をみるため夫婦で茨

城へ引っ越しをしました。孫が卒業して、いわきの高校へ入学が決まったのを機に福島へ戻ってきました。
■最近「なじよすんだ」としか言葉が出てきません
浪江は暖かかったなあ！雪は降ってもすぐに溶けてしまうので歩くのにも支障はなかったなあ！定年を迎え、大好きな山歩きや野菜採り、鮎釣りを楽しもうとしていた矢先でしたから本当に悔しい。夜眠れないことも多いですし、寝てもすぐに目が覚めてしまいます。心も落ち着きません。
何度か家に戻りましたが、背より高くなった草をかき分けないと家までたどり着けません。リフォームしたばかりの我が家が朽ちていくのを見るのは辛いです。家の中を片付けようにもやる気おきません。妻はもう戻りたくないと言いますが、私はやっぱり浪江に帰りたい。
友だちと話をしても「なじよすんだ」としか言葉がでてきません。自分たちではどうにもできません。早く収束することを願うばかりです。



田村とし子さん(小野田)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 徳山
取材日：2月8日

私の心に咲いた希望という一輪のひまわり

小野田から栃木県日光市の借上げ住宅に避難している田村とし子さん。

とても明るく元気な女性というのが第一印象です。

長男が住んでいる日光市に腰をすえて、ご主人とご主人のお母さんの3人で暮らしています。



▲私を救った『希望』と一緒に

地震直後、私はその年の前年度まで小野田地区の民生委員をしていましたので、新任の民生委員の方と一人暮らしのお年寄りの安否確認をしました。
そのときに見た光景は、土砂崩れで道が寸断されていたり、地割れでできた段差に大型トラックが今にも横転しそうな状態で止まっていたり、お寺の燈籠や鳥居も倒壊していて、この地震の凄まじさを目のあたりにしました。
幸いにも訪問先の人たちの安

否確認も取れ自宅に戻ってみると、我が家もひどい状態になっていました。ガラスは割れ、家の中はありとあらゆるものが散乱していました。その夜は続発する余震に震えながら、真っ暗な中家族全員で過ごしました。
翌日の早朝、避難することになり津島に向かいましたが渋滞のためたどり着くことができず、長男が住んでいる栃木県日光市に避難しました。そのまま4カ月間主人と2人で長男夫婦に世話になり、現在は近くの借上げ住宅を借りて主人と主人の母と3人で暮らしています。
震災前、私は浪江町で七宝焼の仕事をしていました。また、自分の工房を持ち作品を制作しながらたくさんの人たちに七宝焼の指導をしていました。しかし、震災後はそんな気持ちにもなれず落ち込んだ日々が続きました。
そんな私に東京で一緒に七宝焼を習っていた友だちが、がれきの中に咲く一輪のひまわりの花の写真を見つけ、それを七宝焼で描いて送ってくれました。題名は「希望」とつけ、元気を

出してくれとメッセージも付いていました。その七宝焼の絵を見たとき、胸が熱くなり涙があふれてきました。
私はここで何をしているのだろう、みんな前に進んでいるのに、私にもたくさんやれることがあるのにと。そして、浪江の人たちやここでお世話になってる日光市の人たちにも以前のように七宝焼を教えてみたいと思うようになりました。
そんな気持ちが強くなっていったとき、二本松の仮設住宅に避難している友人からまた以前のようにならぬと声をかけられ、二本松の仮設住宅に行きアクセサリー作りの講習をしました。皆さんとても上手に仕上がりが笑顔と喜びを見ることができ、また自分への自信にもつながりました。
今では日光市の公民館から七宝焼の講師の依頼を受け、来年度から2回目のペースで始める予定です。恩返しのためにも私にできる限り教えて行きたいと思っています。そして、たくさんの方に恵まれ楽しく前向きに生きて行こうと思います。